ともに悩める喜び

前川　良太

2023 年も残すところあと 1 か月ですね。去年の今頃はこんな風に巻頭を書いているなんて想像もしなかったので、人生わからないもんです。先日、学生時代のゼミの先生に卒業以来にお会いしました。先生と話していると「あの頃は何でもできる！って感じでギラギラしてたよ。ずいぶん大人になったね。」と言われました。これって褒められたんですよね？ちょっと複雑な気持ちになりながらも、保育士 12 年目の冬を迎えました。

事務室にいるようになって 2 年目です。ここにいると、思いもよらない相談に乗ることがあります。それはちょっとしたグチ程度の話から、親しい家族でも踏み込むことをためらうようなシビアな内容までさまざまです。仕事がうまくいかなかった…子育てがしんどい…本人たちにとっては実に深刻な問題を聞きながら、私もどうしたもんかと一緒に頭をひねります。だけどその反面、心の内では申し訳なくもうれしい気持ちになるのです。それは、まさにそんなことも相談し合える関係でありたい、そんな保育園でありたいと願っていたからでした。

先日いっちゃん（一森事務員）がアトムの子育て広場で外国にルーツを持つ家族と出会ったそうです。そのお母さんとの会話を伝え聞いたのですが、とても胸に響くような話でした。そのお母さんは外国籍のご主人と出会い海外生活をし、最近子どもと一緒に帰国されたそうです。そこで感じたことは海外では母は母、子は子で“個”が大事にされる。だけど日本に帰れば母は子と一緒に過ごして当たり前で一時預かりを頼もうと思っても周りから「子どもがかわいそう」と言われるので辛い。というようなことを話していたそうです。そうそう、ホンマにそうやねん！と思わず言いたくなりました。子育て中なんだから、子どものことなんでもやって当たり前、だって親なんだから。そんな世間の目は、私たち親をどんどん孤立させます。親だって自分らしく生きたいし、親だって悩むし、親だからってだけで一人で子育てなんてできません。だからこそ、そんな私たち親には一緒に走ってくれる伴走者が必要です。そんな保育園でありたかったからこそ、本人たちにとっては不幸な相談も、一緒に悩めることがうれしかったのです。

今年の夏、全国保育団体合同研究集会（合研）に「働くことと子育て」という分科会で提案者として参加しました。提案資料をまとめるのに古い合研の資料を探っていたら、30 年ほど前の合研資料に、当時アトムの保護者であった私の母の名前がありました。しかも偶然にも同じ「働くことと子育て」という分科会でした。世代を越えて、アトムでの学びが自分の仕事と子育てを支える糧となっています。私たち家族がここで支えられた分、次の世代に返していくことが私にできる恩返しです。年の瀬が迫り、今年も少しでも“あなたと共にあれたなら”うれしく思います。今年も一年ありがとうございました。2024 年もよろしくね。